FC今治・矢野社長インタビュー

10年、市民と共に

サッカーJ3リーグの「FC今治」が、岡田武史がオーナーとなりリスタートしてから10年。2024年シーズンを2位で締めくくり、初のJ2昇格が決定した。市民の応援を背に、J2への扉を開いた熱きイレブンを率いる矢野将文社長(49)にクラブの歴史や今後の抱負を聞いた。

▶「やったぜ昇格」喜びを表わす矢野（右）井出両社長

▲聞き手はマイタウン・井出千尋社長

祝 おめでとうJ2昇格

マイタウン今治新聞社 井出社長（以下：井出） 改めてJ2昇格おめでとうございます。まず、矢野さんがFC今治の代表になったいきさつに興味があります。

FC今治矢野社長（以下：矢野） 東京大学時代のサッカー部の先輩の紹介で岡田と出会いました。「今治で日本のサッカーの『型』を創る挑戦をしたい」と聞き「自分がやらなければ誰がやる」と思いました。お話をいただいてすぐ家族に相談し、クラブで働くことを決めました。3年目には代表取締役社長を担うことになりました。

井出 それから10年が経ちましたが、これまでの道のりは苦労の連続と思いますが。

矢野 リスタート当時に「アジア1のチーム」を掲げながら、JFLに3年とどまり、J3からJ2に上がるのも5年かかりましたが、目の前のことにがむしゃらに打ち込んできました。「やれること」

理念掲げ着実に進歩 矢野社長

サッカーで地域貢献 井出社長

「やらなければならないこと」をただ一つひとつこなしてきただけです。

井出 社長として意識してやっていることはありますか。

矢野 それこそ何から何までです。岡田がよく「勝負の神様は細部に宿る」と言いますし「リーダーで一番大事なのは、登るべき山を持つこと。山に必死に登る自分の姿を見せること」とも言います。

井出 まさに「背中で見せる」ということですね。そういった努力の積み重ねが昇格につながったと思いますが、一番の要因は何だとお考えですか。

矢野 選手だけでなく、裏方のスタッフも含めて全員が「本気になって全力を尽くさなければ昇格は達成できない」と理解したことだと思います。サッカーは1点を争うスポーツなので、運を含めてすべてを味方につける必要があります。昨年以上に細部までこだわった結果が今回の昇格につながりました。

井出 先日の鳥取戦では、昇格が決まった瞬間に涙しているファンもいて、FC今治が地域に愛されているチームだと感じました。弊社でもサッカーで地域貢献をすべく、毎年「今治少年少女サッカーカーニバル」を主催し、今年で37回目になりました。サッカーチームの経営にも地域貢献という意味合いがあるのでしょうか。

矢野 ありがたいかぎりです。地域に貢献しようと思って始めたのではなく、目標を達成するためには、地域に貢献するということも担わないとうまく行かないと、始めてから気づきました。世界を目指すという大きな目標はありますが、まずは目の前の人々に喜んでもらうことを第一に考えています。

井出 この10年間、市民やサポーターの支持を得ながら着実に進んできたように思います。

矢野 それは、当社が掲げる理念やミッションにぶれることなく、確実にやるべきことをやり続けてきた結果だと思います。その姿勢が、外部から見れば「着実に進んでいる」と感じられているのかもしれません。

井出 その先にはJ1昇格があると思いますが、最後にJ1昇格への戦略があれば教えてください。

矢野 特別な奇策はありません。今やれることを徹底的にブラッシュアップする。その積み重ねの先に次のステージがあると信じています。選手のスキルアップはもちろん、地域全体で指導力を高めること。そしてトップレベルの選手を今治から輩出できるよう、やるべきことを全力で続けていきます。

井出 本日はお忙しい中ありがとうございました。J1昇格へも心より期待しています。